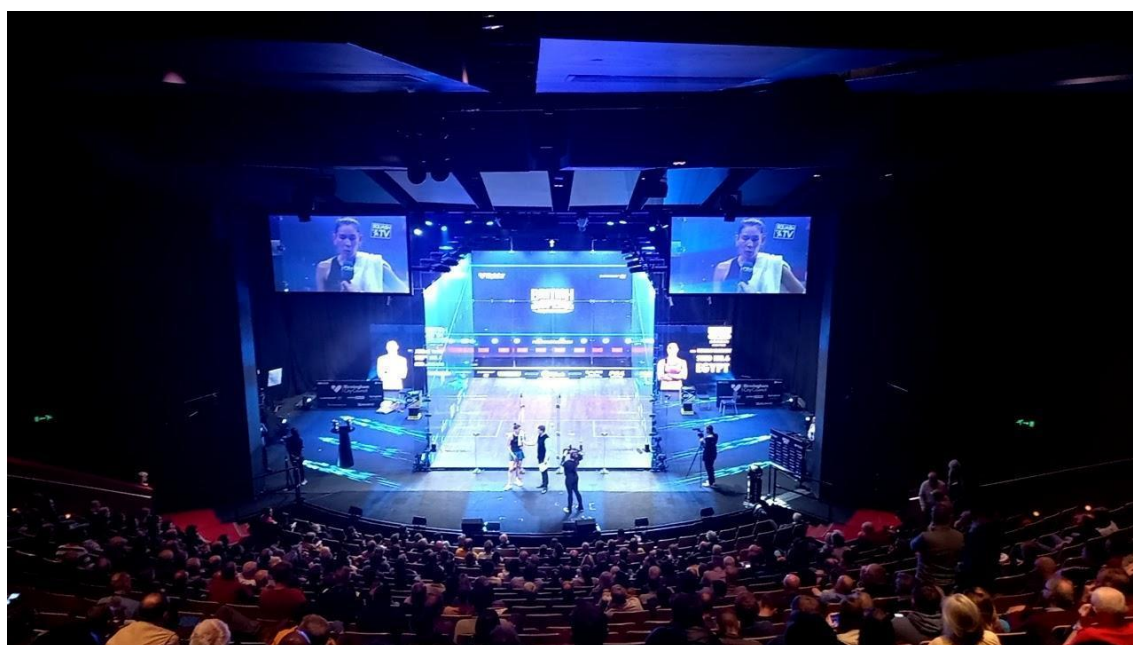


今、正にオリンピック正式競技へのスタートの時 ～イギリスのスカッシュを視察して～

公益社団法人日本スカッシュ協会理事 出口 陽万

2023年の春、イギリスのバーミンガムで開催されたブリティッシュオープンを観戦しました。この大会は、世界最高峰のスカッシュのトーナメントのひとつで、日本選手の応援や大会の見どころをお伝えします。また、週末に開催されたマスターズ大会やロンドンのスカッシュ施設なども視察し、イギリスのスカッシュ事情についてもレポートします。イギリスは、スカッシュの発祥の地であり、スカッシュの歴史や文化、普及や発展の取り組みなど、多くのことを学ぶことができました。日本スカッシュのさらなる普及発展のために、今後もイギリスのスカッシュとの交流を深めていきたいと思えます。



British Open Squash 2023
The House at Birmingham Rep
<https://www.birmingham-rep.co.uk/>

2023年のブリティッシュオープンは、イギリスのバーミンガムで開催されました。この大会は、世界最高峰のスカッシュのトーナメントのひとつで、男女ともにトップ32の選手が出場しました。今年の会場は、バーミンガムの中心部にある文化施設「Birmingham Rep」と、その近隣にある「EDGBASTON PRIORY CLUB」でした。Birmingham Repは、普段は演劇やコンサートなどが開催されているステージに、ガラス製のコートを設定して、準々決勝以降の試合が行われました。この会場は、観客席が高くなっているため、選手の動きを見やすく、迫力のある試合を楽しむことができました。また、大型スクリーンや照明なども効果的に使われ、スカッシュの魅力を最大限に引き出していました。



EDGBASTON PRIORY CLUB は、Birmingham Rep から車で約 15 分のところにある、歴史あるスカッシュクラブです。ここでは、予選ラウンドと 1 回戦の試合が行われました。この会場では、日本から海道泰喜理事、机龍之介選手、渡邊聡美選手、緑川あかり選手の姿があり、机選手の試合を応援することができました。国際大会で健闘する机選手の姿に、日本のスカッシュの将来に大きな期待を感じました。今年のチャンピオンは、男子がエジプトのアリ・ファラグ選手、女子がエジプトのヌール・エル・シェルビニ選手でした。ファラグ選手は、決勝でペルーのディエゴ・エリアス選手に 3-1 で勝ちました。エル・シェルビニ選手は、決勝でエジプトのヌーラン・ゴーハン選手に 3-0 で勝ちました。エジプト勢は、男女ともにベスト 8 の多数を占めるなど、圧倒的な強さを見せました。ブリティッシュオープンには、スカッシュの醍醐味やポテンシャルを感じることができる素晴らしい大会でした。日本の選手たちも、世界のトッププレイヤーと戦うことで、経験や自信を得ることができたと思います。

EDGBASTON PRIORY CLUB

<https://www.edgbastonpriory.com/>

WSF Squash57 担当

Patrick Osborn 氏

この大会では、イギリスのスカッシュ界の重要な人物とお話する機会がありました。パトリック・オズボーン氏は、WSF のスカッシュ 57 担当者であり、日本とイギリスのスカッシュの交流にも熱心な方です。マーク・ウィリアムズ氏は、イングランドスカッシュの CEO であり、イギリスのスカッシュの発展に尽力しています。パトリック氏やウィリアムズ氏によると、イギリスには約 2,000 のスカッシュ施設があり、歴史あるイングランドスカッシュを中心に普及活動を行っているとのことでした。今回の大会でも、Birmingham Rep の会場前では、ミニコートを使用して子供や初心者向けのスカッシュイベントを開催していました。イギリスのスポーツ界においても、スカッシュは人気はあるものの、まだメジャーとは言えないという現状を説明してくれました。そのため、スカッシュの普及や新規愛好者の獲得に注力しているということでした。その点は、日本も変わらないと感じました。私たちは、日本とイギリスのスカッシュの現状や課題について、問題意識を共有しました。パトリック氏やウィリアムズ氏は、スカッシュ 57 の普及活動にも力を入れていると話してくれました。スカッシュ 57 は、ボールの直径が 57mm の大きなボールを使うスカッシュのバリエーションで、スカッシュよりもボールのスピードが遅く、ラリーが長くなりやすいため、初心者や高齢者にも楽しめるというメリットがあります。また、スカッシュ自体の普及や発展にも効果的であると期待しているということでした。実際に、ダリル・セルビー選手など、スカッシュとスカッシュ 57 の両方でイギリス選手権のタイトルを獲得し、活躍する選手も出てきています。

パトリック氏の紹介で、ゼナ・ワールドリッジ氏にバーミンガム大学のスポーツ施設を案内していただきました。ワールドリッジ氏は、バーミンガム大学のスポーツ・運動科学部長の職に就いており、WSF の会長です。バーミンガム大学のスポーツ施設は、5 面のシングルコートと 1 面のダブルスコートを有するスカッシュコートのほか、柔道場、プール、バスケットボールコートなど、素晴らしい施設が揃っていました。ワールドリッジ氏によると、このような施設を有する大学が周辺に数カ所存在するということでした。イギリスの大学では、スカッシュを含むスポーツが教育の一環として重視されていることがわかりました。イギリスのスカッシュ界の方々とお話することで、スカッシュの歴史や文化、普及や発展の取り組みなど、多くのことを学ぶことができました。日本とイギリスのスカッシュの交流を深めることで、お互いに刺激を受け、成長できると感じました。今後も、日本のスカッシュの発展のために、国際的な視野を持ち、積極的に情報交換や協力を行っていきたいと思います。



CITY OF PETERBOROUGH SPORTS CLUB
<https://www.cityofpeterboroughsportsclub.co.uk/>
Inter Counties CHAMPIONSHIPS SENIORS 会場



ブリティッシュオープンを観戦後、パトリック氏とイングランド東部地方のピーターバラに移動して、シニア大会のチーム戦を観戦しました。この大会は、イギリス各地から集まったシニアのスカッシュチームが、年齢別に分かれて争う大会でした。イギリスでは、シニアのスカッシュが盛んで、このような大会が多数開催されているとのことでした。会場は、広大な敷地にあるスポーツクラブで、家族連れや飼い犬が駆け回る中、グラウンドホッケーの試合も行われていました。クラブハウスの中には、6面のスカッシュコートがあり、熱戦を繰り広げていました。試合後は、対戦相手とクラブハウスのパブで歓談しました。その日は、世界一過酷な障害競馬レースと言われるグランドナショナルの中継があったため、皆で鑑賞し大いに盛り上がりました。シニア大会のチーム戦は、スカッシュの楽しさや仲間づくりの大切さを教えてくれる大会でした。パトリック氏のチームメートは、**2027年のWMG関西出場を計画している**と聞き、日本での再会を誓いました。

ROYAL AUTOMOBILE CLUB

<https://www.royalautomobileclub.co.uk/>

シニア大会の観戦後、ロンドンに移動し、数カ所のスカッシュ施設を視察しました。ロンドンは、スカッシュの発祥の地であり、多くの歴史あるスカッシュクラブや施設があります。中でも印象に残ったのは、小林海咲さんや渡邊聡美選手が通ったことでも知られる、**100年以上の歴史を持つロイヤル・オートモビル・クラブ**でした。このクラブは、ロンドンの中心部にある、イギリスの名門クラブのひとつです。**1907年**に創設され、スカッシュのほかにも、テニス、ゴルフ、水泳など、さまざまなスポーツを楽しむことができます。このクラブのスカッシュコーチであるジョン・ウッドヘッド氏に、施設内を案内していただきました。コーチによると、このクラブには、**5面のスカッシュコート**があり、そのうちの**1面**は、スカッシュの創生期から使われているということで、コートの中には、スカッシュの歴史を展示したギャラリーがあり、現在のスカッシュボールの原型や、歴代のスカッシュプレーヤーや関係者の写真が展示されていました。スカッシュコートの横には重厚な扉があり、格式高いパブに通じていました。コーチによると、このパブは、スカッシュの試合後に、対戦相手や仲間と歓談する場所として、重要な役割を果たしているということで、コーチは、渡邊聡美選手も、大会後のレセプションで、大会関係者とともにエレガントに交流していたと話してくれました。渡邊選手の活躍と品格に私もとても誇らしい

気持ちになりました。ロイヤル・オートモビル・クラブは、スカッシュの伝統や文化を感じることができる素晴らしい施設でした。



SOUTHBANK CLUB

<https://www.southbankclub.co.uk/>

Jarek Stachowiak 氏

ロンドンでの視察の中で、2022年WSFスタッフからの紹介で知り合ったヤレク氏のホームコートであるサウスバンク・クラブにも訪問できました。このクラブは、スカッシュ専用の施設で、4面のスカッシュコートと、ジムやサウナなどの設備があります。このクラブのオーナーであるジョン・スミス氏に、施設の歴史や運営についてお話を聞きました。

スミス氏によると、このクラブは、先代から受け継いだ施設で、元は映画館だったということで、そのため、スカッシュコート天井が高く、広々としているという特徴があり、スカッシュの伝説であるジャンギル・カーン氏が、試合前に練習コートとして滞在していたというエピソードをお話しいただきました。スミス氏は、イギリスのスカッシュ界におけるスカッシュブックメーカーの話題も提供してくれました。スカッシュブックメーカーとは、スカッシュの試合の結果やスコアなどに賭けることができるサービスのことで、イギリスでは、合法的なスカッシュブックメーカーも存在し、選手や対戦施設のコンディションなどの詳細情報を参考にして、スマホで気軽にビッドできるということでした。スミス氏は、スカッシュブックメーカーは、スカッシュの試合に興味や緊張感を持たせる効果があると話してくれました。



WSFCEO

William Louis-Marie 氏

<https://www.worldsquash.org/>

そして、WSFCEO のウィリアム・ルイス氏と、パリで面談する機会がありました。JSA 機関誌にて日本スカッシュの現状を説明し、延期になった WMG 関西の募集時にアジアからのエントリーが多数で、欧米からのエントリーが少なかったことをお話し、2027 年の WMG 関西に向けて、ヨーロッパ地区からの参加協力を要請しました。また、当時スカッシュ開催未定だった 2026 年の愛知・名古屋アジア競技大会や 2028 年の LA オリンピックにも話題が及びました。ウィリアム氏からは、日本からの学生国際大会への参加促進や全日本でのガラスコート開催に注目している旨の言及がありました。フランスには約 300 のスカッシュ施設があり、世界ランキングの上位にも多くの選手がおり、2024 年のパリオリンピックでのスカッシュのプロモーションを考えているとのことでした。

日本では、2026年の愛知・名古屋アジア競技大会、2027年のワールドマスターズゲームス関西、そして2028年のロサンゼルスオリンピックと、スポーツのゴールデンシーズンを迎えようとしています。その中で、スカッシュは2028年にオリンピックの追加競技となりましたが、これからが正式競技入りに向けての重要な時期の始まりです。今回のイギリス訪問を通じて、日本のスカッシュの更なる普及発展のための課題をより明確に実感できました。スカッシュの普及発展のためには、スカッシュの知名度を上げるための普及の取り組み、トップ選手の育成と支援、ジュニアの育成、コート環境の改善、国際的な連携の強化など、様々な課題があります。日本協会は、これらの課題に取り組んでいくとともに、スカッシュの魅力を広く伝えていきたいと思ひます。スカッシュの未来に向けて、皆様のご支援とご協力をお願いします。今、正式競技入りに向けてその第一歩を踏み出す正にスタートの時です。日本のスカッシュファンと共に、スカッシュの歴史を作っていきたいと思ひます。